

受賞作品

データ分析の力 因果関係に迫る思考法

伊藤公一朗 著
光文社 284 ページ、780 円（税別）



書評

経済問題の因果性を論証

関西大学教授 本多佑三

薬を投与したグループと投与しないグループの治癒率を比べ、その効力を検証するのは、新薬（原因）が病気に与えた影響（結果）を科学的に検証する際の有力な手法である。本書は同様の手法を具体的な経済問題に適用し、変数間の因果性を論証している。

本書の中で著者は需要に応じて変動する料金を課すグループと、一律の料金を課すグループを比べることで、各世帯が電力価格に対しどの程度敏感に反応し、消費を変えるかについて、実際に北九州市などで行われた実験結果を紹介している。それによると、需要に応じた料金体系は節電対策として極めて有効であることがわかったという。

しかし、2つの同質のグループを作って実際に実験するのは経済分野でも医療分野でも多大の労力・時間・費用がかかるため、容易ではない。そこで、著者は経済制度・規制などの先験的情報を利用して、そうした費用を節約するいくつかの代替的手法を提案。そうした手法を用いることで、例えば日本の自動車燃費規制は米国とは異なり、実はより重い車を造る誘因をメーカーに与えていて、それが規制の効果を弱め、社会に非効率をもたらし、事故時の安全性も損なっていることを明らかにしている。

著者は他にも数多くの興味深い実証結果を示し、その背景を分かりやすく解説している。もしかすると同様の手法を用いて新しい論文が書けるのではないか、読者にそんな錯覚を起こさせる、知的興味をそそる本である。